

■第13回街づくりA | 研究会報告

「ZOOMと格闘した半年」

令和2年12月29日(火) 18:30~20:00

NPO法人高度情報通信都市計画シンクタンク会議 副理事長 守茂昭氏 (進行・まとめ) 株式会社シグマ開発計画研究所 取締役 原拓也氏 (進行)

基本報告:

株式会社シグマ開発計画研究所 取締役 原拓也氏「日本都市計画家協会で行ったZOOMイベントの顛末」
株式会社街づくりまんぼう街づくり推進課長 荻谷智大氏「全国まちづくり会議石巻分科会」

NPO法人高度情報通信都市計画シンクタンク会議 理事・事務局長 守真弓氏「荻窪音楽祭で実施したOnline演奏会」

守(茂): コロナに強い選択であったが、必ずしも簡単と言えないテレビ会議システムの使い方を世界中で学んでしまった半年であった。

原: 日本都市計画家協会では、会議、イベントともにZOOMで実施し続けたこの半年であるが、誤算は有償イベント(まちづくりカレッジ)の集客に苦労した点である。ネット上のイベントは無料イベントが多いことから、会費の提示があるだけで視聴者は引いてしまうようである。荻谷: 石巻分科会の冒頭で、街歩き紹介の動画を配信した。

旅番組や天気予報のイメージでTVレポーター風に収録した。分科会が硬い話になることが想定できたので少しでもそれを柔らげるのに手頃な動画になった。

守(真): 荻窪音楽祭は、元来、市街地で分散して開催する音楽イベントであったが、ZOOMで各演奏者が自分

の演奏をアップし合うことで、本来の音楽祭で交わっていた交流をweb上で再実現できた。ネット上の生の対話が非常時に再現される意味をもつ企画となった。
守(茂): 多くのテレビ会議システムがある中でZOOMが選ばれることが多いのは、その使い易さに理由がある。が、使い易いと言っても、少しでも積極的に情報発信することを考えると、それなりにノウハウを勉強する必要が出る。家協会25周年事業のとき、会場に登壇した講師を撮影しつつZOOMで配信するのは苦労していた。

原: ZOOMで遠隔参加した小澤元審議官の発信や会場討論の様子の映像撮影は、画像編集の専門家を呼び、自前で行うのは避けた。

守(真): 荻窪音楽祭のOnline演奏会は、演奏者が自分の演奏を自分でZOOMにアップするため、その操作法を指南する必要があり、その操作について来られる人しか参加できなかった。

原: ZOOMは一般でも使えると言いつつ、一般がやれる範疇にはやはり限界がある。

守(茂): コロナ騒動が去った後に、何かが残るべきとするなら一般人の映像発信がシームレスに行える技術環境と操作ノウハウであろう。Web上の対面はリアルな対面より格が落ちるといいながら、タイミングによっては大きな意味を持つ。必要なときに必要な面会をweb上で行えるノウハウを残せるならコロナ騒動で苦しむ甲斐もあるかもしれない。



街づくり活動に用いた場合のZOOMの得失 (メモ例)

利点

- ◎初心者が比較的簡単にアクセスできる。
- ◎発信側も、とりあえずの簡易発信であれば容易にできる。
- ◎複数発言のコミュニケーションが実現できる。
- ◎講演中でもチャットで意見を流せる。
- ◎録画・再配信が簡単にできる。

難点

- ◎マイク、カメラなど周辺装置に凝り始めると、操作は必ずしも簡単ではなくなる。(PCによるデバイスの設定以外にZOOMによるデバイスの設定画面の操作が必要になる)
- ◎動画を送信する場合、映像の品質を上げようとすると技術的熟練が必要になってくる。(例えばハンディカメラで生映像を送るのは結構たいへん⇒経験者の体験談を期待)

◎複数人が集合して参加する会場や、大画面共有で複数人が視聴参加する場合、ハウリングが起きやすくなるが、これといった絶対的な解決法がない。全員ミュートにすればハウリングは止められるが、人数が多い場合コントロールしにくいケースも生まれる。(単独PCで使用する場合ハウリングが起きにくい、単独PCの場合ソフト上のハウリング防止策がZOOMサイドで設定されているように感じる。)